

大学1年生への中退予防の取り組みへの検討

—大学生活に対する入学前の期待と入学後の評価の観点から—

小 正 浩 徳

緒言

中途退学する学生への対応ということは、全国の大学の課題の1つであるのは間違いない。本学も当然その課題は抱えており、この課題を解決するべく様々な取り組みがなされている。

本研究では、大学中退予防に向けた取り組みを行うための検討を目的とし、これまで本学の自己応募研究プロジェクトで得られたデータから分析を試みるものである。

大学や高等専門学校等の中退する理由について、文科省（2021, 2024）によれば、2020年度（4月から12月）は経済的困窮が最もその割合が大き（19.3%）、次いで学生生活不適応・就学意欲低下（18.3%）となっている。一方で、2023年度（4月から3月）では、最も割合が大きなのは転学・進路変更等（22.0%）で、次いで学生生活不適応・就学意欲低下（16.5%）となっており、経済的困窮は13.6%で4番目になった。この4年間の中で、大学等の中退する学生の理由に変化が生じていることが考えられる。

JAIC（2024）が、2023年に大学中退または中退予定者に対して中退理由を調査したところ、最も割合が大きかったのは、「授業内容に興味を持てなかったから」（27.9%）であり、次いで「留年したから」（22.8%）、「経済的事情・家庭問題」（17.9%）の順であった。

大学入学時の期待有無と中退時の満足度という観点からの分析もある（谷田川, 2017）。これによると、大学入学にあたり期待せずまた中退時にも不満を抱えていた群ならびに大学入学にあたり期待していたが中退時には不満を抱えた群は、入学にあたり期待していなかったが中退時満足に変わった群ならびに入学にあたり期待しており中退時に満足していた群と比べて、学業面の問題や大学

への不適応を理由として挙げる割合が高かった。

また、大学中退の問題には、「不本意入学」というキーワードも聞かれるところである。樋口（2013）は、志望順位と転学・退学の関係について、入学した大学の志望順位と転学意向は関係していること、退学意向と大学志望順位とは関係していないことを示唆している。山下（2014）は、大学の志望度ではなく、学部志望度と退学の関係を示唆している。つまり、学びたい学部ではないところに不本意入学すると退学意向が強くなるということである。

これらのことから、大学の中退予防を検討するにあたって、学生の志望順位と入学前の期待と入学後にそれをどう評価しているのかという2つの視点は重要な要因になることが考えられる。そこで、この2つの要素を用いて、①志望順位別にみる大学入学前の期待感と入学後の思いの変容を調べる。②「志望順位」と「入学後の評価」からみた「大学適応感尺度」得点の差を調べる。この2つの調査結果から、本学での中退予防に向けた取り組みについて具体的な方法を考えてみたい。

方法

調査内容 小正（2020）により作成された大学適応感質問紙を用いた。本調査では、「志望順位」（1問）、「大学生活への期待感と実際の大学生活についての評価」（計6問）⁽¹⁾、「大学適応感」⁽²⁾（計22問）を分析対象とした。

「志望順位」は、「第1志望」、「第2志望」、「第3志望以下」のいずれかについて、回答を求めた。

「大学生活への期待感と実際の大学生活についての評価」は、「大学の居心地の良さ」、「自分が学びたいことを学べる時間」、「大学での友人関係」の3項目について尋ねた。大学生活への期待感を確認するために、「入学する前にどれくらい期待していたか」と尋ね、「5：期待していた」から「1：期待していなかった」の5件法で回答を求めた。また、実際の大学生活についての評価は、「入学した後実際に大学生活を送る中で、現在の「○○」⁽³⁾についてどう思いますか。」と尋ね、「5：期待したよりも、満足している」から「1：期待したよりは、不満である」に加え、「0：入学前に思っていたとおりである」という計6件から回答を求めた。

「大学適応感」は、次の4因子で構成されている。「大学帰属感因子」（計6問）、「友人関係満足感因子」（計6問）、「学び満足感因子」（計6問）、「教員サポート感因子」（計4問）である。それぞれ、「5：あてはまる」から「1：あ

てはまらない」の5件法で回答を求めた。

デモグラフィック項目として所属する学部学科を確認しているが、本調査においては分析対象としていない。

調査対象 2020年，2021年，2023年のそれぞれ10月～12月に大学適応感質問紙に回答した本学4年制学部ならびに短期大学部に通う1年生計344名である。

調査方法 webによるオンライン調査を実施した。実施にあたり，心理学系の講義にて調査内容の説明と協力を呼び掛けた。統計分析と結果を記すにあたりweb版の「js-STAR XR+ release 2.1.2 j」とWindows版の「R version 4.3.2」を用いた。

結果と考察

1. 志望順位別にみる大学入学前の期待感と入学後の評価

大学への「志望順位」（第1志望群，第2志望群，第3志望以下群の3群）と，「大学生活への期待感と実際の大学生活についての評価」を確認するために，Fisherの正確検定を行った。以下に，（1）第1志望群，（2）第2志望群，（3）第3志望以下群の順で結果ならびに考察を記載する。

なお，分析を行うにあたり，「大学生活への期待感と実際の大学生活についての評価」について，まず，「大学生活への期待感」に関する質問において，「3：どちらともいえない」と回答した者を除外した。そして，「5：期待していた」，「4：やや期待していた」と回答した者を，「入学前に期待していた」群としてまとめた。「2：やや期待していなかった」，「1：期待していなかった」と回答した者を「入学前に期待していなかった」群としてまとめた。

続いて，「実際の大学生活についての評価」でも「3：どちらともいえない」と回答した者を除外した。そして，「5：期待していたよりも，満足している」，「4：期待したよりも，やや満足している」と回答した者を，入学後の評価は「満足している」群としてまとめた。「2：期待したよりも，やや不満である」，「1：期待したよりは，不満である」と回答した者は，「不満」群としてまとめた。「入学前に期待していた」群で入学後の評価を「0：入学前に思っていたとおりである」と回答した者は，「満足している」群にまとめた。同様に，「入学前に期待していなかった」群で入学後の評価を「0：入学前に思っていたとおりである」と回答した者を，「不満」群としてまとめた。

これらの処理を，「大学の居心地の良さ」，「自分が学びたいことを学べる時

表1 第1志望で入学した学生の、入学前の「大学の居心地の良さへの期待度」別にみた入学後の「大学の居心地」への評価

	不満	満足している	計
入学前、期待していなかった	7	15	22
入学前、期待していた	24	44	68

表2 第1志望で入学した学生の、入学前の「学びたいことを学べる時間への期待度」別にみた入学後の「学びたいことを学べる時間」への評価

	不満	満足している	計
入学前、期待していなかった	2	0	2
入学前、期待していた	54	53	107

間」,「大学での友人関係」の項目ごとに行った。それゆえ,分析対象となった人数が項目ごとに異なる。

(1) 第1志望群

①大学の居心地の良さへの期待と評価

大学の居心地の良さについて,入学前に期待していた群と期待していなかった群による入学後の居心地の良さの評価を表1にまとめた。この表1において, Fisherの正確検定を行った結果,有意でなかった($p=1$)。 χ^2 値から算出した効果量($w=0.004, 1-\beta=0.05$)は便宜的基準(Cohen, 1992)によると小さいと判断される。

②自分が学びたいことを学べる時間があることへの期待と評価

自分が学びたいことを学べる時間があることについて,入学前に期待していた群と期待していなかった群による入学後学びたいことを学べる時間があるかどうかの評価を表2にまとめた。この表2において, Fisherの正確検定を行った結果,有意でなかった($p=0.495$)。 χ^2 値から算出した効果量($w=0.065, 1-\beta=0.104$)は便宜的基準(Cohen, 1992)によると小さいと判断される。

表3－1 第1志望で入学した学生の、入学前の「友人関係期待度」別にみた入学後の「友人関係」への評価

	不満	満足している	計
入学前、期待していなかった	6	19	25
入学前、期待していた	41	36	77

表3－2 表3－1の残差分析

	不満	満足している
入学前、期待していなかった	－2.55	2.55
入学前、期待していた	2.55	－2.55

③大学での友人関係への期待と評価

大学での友人関係について、入学前に期待していた群と期待していなかった群による入学後の友人関係に対する評価を表3－1にまとめた。表3－1においてFisherの正確検定を行った結果、有意であった ($p=0.012$)。 χ^2 値から算出した効果量 ($w=0.23, 1-\beta=0.64$) は便宜的基準 (Cohen, 1992) によると小さいと判断される。検出力 ($1-\beta$) は不十分であり、信頼性が低い。

調整された残差を表3－2に示す。各セルの残差について両側検定 ($\alpha=0.05$) を行った結果、入学前に期待していなかった群において入学後、満足していないと回答した度数が期待度数より有意に少なく ($z=-2.549$, adjusted $p=0.01$)、また入学後、満足していると回答した度数が期待度数より有意に多かった ($z=2.549$, adjusted $p=0.01$)。入学前に期待していた群においては入学後、満足していないと回答した度数が期待度数より有意に多く ($z=2.549$, adjusted $p=0.01$)、また入学後、満足していると回答した度数が期待度数より有意に少なかった ($z=-2.549$, adjusted $p=0.01$)。

以上の p 値の調整にはBenjamini & Hochberg (1995) の方法を用いた。

これらの結果から、大学の居心地の良さ、自分が学びたいことを学べる時間、大学での友人関係の3点について、第1志望群は、友人関係において入学前の期待の度合いによって、入学後に満足しているかどうかの違いがあることが明らかになった。具体的には、友人関係に対する期待をしていなかった群は入学

表4 第2志望で入学した学生の、入学前の「大学の居心地の良さへの期待度」別にみた入学後の「大学の居心地」への評価

	不満	満足している	計
入学前、期待していなかった	5	18	23
入学前、期待していた	14	22	36

表5 第2志望で入学した学生の、入学前の「学びたいことを学べる時間への期待度」別にみた入学後の「学びたいことを学べる時間」への評価

	不満	満足している	計
入学前、期待していなかった	3	4	7
入学前、期待していた	37	33	107

後にその思いに反して満足している。一方で、期待していた群は、入学後、期待に反して満足していない、つまりはギャップを感じている学生が一定数いることが明らかになった。

(2) 第2志望群

①大学の居心地の良さへの期待と評価

大学の居心地の良さについて、入学前に期待していた群と期待していなかった群による入学後居心地の良さの評価を表4にまとめた。この表4において、Fisherの正確検定を行った結果、有意でなかった ($p=0.254$)。 χ^2 値から算出した効果量 ($w=0.142, 1-\beta=0.193$) は便宜的基準 (Cohen, 1992) によると小さいと判断される。

②自分が学びたいことを学べる時間があることへの期待と評価

自分が学びたいことを学べる時間があることについて、入学前に期待していた群と期待していなかった群による入学後学びたいことを学べる時間があるかどうかの評価を表5にまとめた。この表5において、Fisherの正確検定を行った結果、有意でなかった ($p=0.704$)。 χ^2 値から算出した効果量 ($w=0.012, 1-\beta=0.051$) は便宜的基準 (Cohen, 1992) によると小さいと判断される。

表6 第2志望で入学した学生の、入学前の「友人関係期待度」別にみた入学後の「友人関係」への評価

	不満	満足している	計
入学前、期待していなかった	11	13	24
入学前、期待していた	28	28	77

表7 第3志望で入学した学生の、入学前の「大学の居心地の良さへの期待度」別にみた入学後の「大学の居心地」への評価

	不満	満足している	計
入学前、期待していなかった	10	23	33
入学前、期待していた	6	13	19

③大学での友人関係への期待と評価

大学での友人関係について、入学前に期待していた群と期待していなかった群による入学後の友人関係に対する評価を表6にまとめた。表6においてFisherの正確検定を行った結果、有意でなかった ($p=0.809$)。 χ^2 値から算出した効果量 ($w=0.011, 1-\beta=0.051$) は便宜的基準 (Cohen, 1992) によると小さいと判断される。

これらの結果から、大学の居心地の良さ、自分が学びたいことを学べる時間、大学での友人関係の3点について、第2志望群は、友人関係において入学前の期待の度合いによって、入学後に満足しているかどうかの違いがみられないことが明らかになった。

(3) 第3志望以下群

①大学の居心地の良さへの期待と評価

大学の居心地の良さについて、入学前に期待していた群と期待していなかった群による入学後居心地の良さの評価を表7にまとめた。この表7において、Fisherの正確検定を行った結果、有意でなかった ($p=1$)。 χ^2 値から算出した効果量 ($w=0, 1-\beta=0.05$) は便宜的基準 (Cohen, 1992) によると小さいと判断される。

表8 第3志望で入学した学生の、入学前の「学びたいことを学べる時間への期待度」別にみた入学後の「学びたいことを学ぶ時間」への評価

	不満	満足している	計
入学前、期待していなかった	3	3	6
入学前、期待していた	32	31	63

表9-1 第3志望で入学した学生の、入学前の「友人関係期待度」別にみた入学後の「友人関係」への評価

	不満	満足している	計
入学前、期待していなかった	4	19	23
入学前、期待していた	21	21	42

表9-2 表9-1の残差分析

	不満	満足している
入学前、期待していなかった	-2.58	2.58
入学前、期待していた	2.58	-2.58

②自分が学びたいことを学べる時間があることへの期待と評価

自分が学びたいことを学べる時間があることについて、入学前に期待していた群と期待していなかった群による入学後学びたいことを学べる時間があるかどうかの評価を表8にまとめた。この表8において、Fisherの正確検定を行った結果、有意でなかった ($p=1$)。 χ^2 値から算出した効果量 ($w=0, 1-\beta=0.05$) は便宜的基準 (Cohen, 1992) によると小さいと判断される。

③大学での友人関係への期待と評価

大学での友人関係について、入学前に期待していた群と期待していなかった群による入学後の友人関係に対する評価を表9-1にまとめた。表9-1においてFisherの正確検定を行った結果、有意であった ($p=0.015$)。 χ^2 値から算出した効果量 ($w=0.287, 1-\beta=0.64$) は便宜的基準 (Cohen, 1992) によると

ほぼ中程度と判断される。検出力 $(1-\beta)$ は不十分であり、信頼性が低い。

調整された残差を表 9-2 に示す。各セルの残差について両側検定 ($\alpha=0.05$) を行った結果、入学前に期待していなかった群において入学後、満足していないと回答した度数が期待度数より有意に少なく ($z=-2.584$, adjusted $p=0.009$)、また入学後、満足していると回答した度数が期待度数より有意に多かった ($z=2.584$, adjusted $p=0.009$)。入学前に期待していた群においては入学後、満足していないと回答した度数が期待度数より有意に多く ($z=2.584$, adjusted $p=0.009$)、また入学後、満足していると回答した度数が期待度数より有意に少なかった ($z=-2.584$, adjusted $p=0.009$)。

以上の p 値の調整には Benjamini & Hochberg (1995) の方法を用いた。

これらの結果から、大学の居心地の良さ、自分が学びたいことを学べる時間、大学での友人関係の 3 点について、第 3 志望以下群は、第 1 志望群と同様に、友人関係において入学前の期待の度合いによって、入学後に満足しているかどうかの違いがあることが明らかになった。具体的には、友人関係に対する期待をしていなかった群は入学後にその思いに反して満足している。一方で、期待していた群は、入学後、期待に反して満足していない、つまりはギャップを感じている学生が一定数いることが明らかになった。

2. 「志望順位」と「入学後の評価」からみた「大学適応感尺度」得点の差

続いて、「志望順位」(第 1 志望群、第 2 志望群、第 3 志望以下群の 3 群)と「入学後の評価」(入学後不満低群、入学後不満高群の 2 群)という 2 要因について、大学帰属感尺度の「大学帰属感」、「友人関係満足感」、「学び満足感」、「教員サポート感」の 4 因子の得点に対する分散分析を行った。

なお、「入学後の評価」を「入学後不満低群」、「入学後不満高群」の 2 群に分けるにあたり、谷田川 (2017) を参考にし、次のような手続きをとった。

まず、「入学前期待していなかったと回答し、入学後、入学前の思いと変わらないと回答」した場合、「入学前期待していなかったと回答し、入学後、入学前よりも不満であると回答」した場合、「入学前期待していたと回答し、入学後、入学前よりも不満であると回答」した場合の 3 つのパターンを「入学後不満」とした。そして、「入学前期待していなかったと回答し、入学後、入学前よりも満足していると回答」した場合、「入学前期待していたと回答し、入学後、入学前の期待通りと回答」した場合、「入学前期待していたと回答し、

表10 志望順位別による入学後不満低群・高群のクロス集計表

	不満低群	不満高群	計
第1志望	29	22	51
第2志望	20	14	34
第3志望以下	23	9	32

入学後、入学前よりも満足していると回答」した場合を「入学後満足」とした。

そして、「大学の居心地の良さ」,「自分が学びたいことを学べる時間」,「大学での友人関係」の3項目において「どちらとも言えない」と回答した者を除外した。結果、分析対象は117名となった。この117名について、「大学の居心地の良さ」,「自分が学びたいことを学べる時間」,「大学での友人関係」の3項目に対し「入学後不満」となった数をそれぞれ数えた。この3項目に対して「入学後不満」の数が0または1となった者を「入学後不満低群」(N=72)とした。同様に、2または3となった者を「入学後不満高群」(N=45)とした(表10)。

① 志望順位が入学後不満の高低に与える影響

まず、志望順位によって不満低群と不満高群の人数に影響を与えているかどうかを確認するために、表10においてFisherの正確検定を行った。その結果、有意でなかった($p=0.377$)。 χ^2 値から算出した効果量($w=0.131, 1-\beta=0.228$)は便宜的基準(Cohen, 1992)によると小さいと判断される。

② 「大学帰属感」得点の差

志望順位別による入学後不満低群と入学後不満高群の「大学帰属感」得点の結果を表11-1にまとめた。

2要因の参加者間分散分析(Type III_SS使用)を行った結果(表11-2参照)、志望順位の主効果が有意であり($F(2, 111)=3.541, p=0.032, \eta^2=0.06, 1-\beta=0.673$)、入学後不満低・高群の主効果が有意であり($F(1, 111)=33.076, p=0, \eta^2=0.23, 1-\beta=0.999$)、交互作用は有意でなかった($F(2, 111)=0.087, p=0.916, \eta^2=0.002, 1-\beta=0.063$)。

志望順位の主効果の検出力($1-\beta$)は不十分であり、信頼性が低い。入学

表11－1 志望順位別による入学後不満低群と入学後不満高群の「大学帰属
感」得点

		平均	分散	最小値	最大値
第1志望	不満低群 (N=29)	3.90	0.63	2.7	4.8
	不満高群 (N=22)	2.98	0.88	1.7	4.7
第2志望	不満低群 (N=20)	3.87	0.98	2.2	5.0
	不満高群 (N=14)	2.93	0.98	1.0	4.2
第3志望以下	不満低群 (N=23)	3.46	0.90	1.0	5.0
	不満高群 (N= 9)	2.37	0.89	1.3	3.7

表11－2 分散分析の結果

	Type III _SS	df	MS	F	p	ηp^2
志望順位 (A)	5.245	2	2.623	3.541	0.032	0.060
不満低・高群 (B)	24.497	1	24.497	33.076	0.000	0.230
A × B	0.129	2	0.064	0.087	0.917	0.002
s	82.210	111	0.741			

表11－3 分散の均一性の検定

	χ^2	df	p
Bartlett Test	5.789	5	0.327

後不満低・高群の主効果の検出力は十分である。

参加者間の分散の均一性についてBartlett検定を行った結果（表11－3参照）、有意でないことを確認した（ $\chi^2(5)=5.789, p=0.327$ ）。

志望順位の主効果について、プールドSDを用いた t 検定による多重比較（ $\alpha=0.05$, 両側検定）を行った結果、どの2群の平均の差も有意でなかった（adjusted $ps>0.252$ ）。

入学後不満低・高群の主効果については、入学後不満低群の平均3.751が入学後不満高群の平均2.842よりも有意に大きかった。

以上の p 値の調整にはBenjamini & Hochberg（1995）の方法を用いた。

表12-1 志望順位別による入学後不満低群と入学後不満高群の「友人関係満足感」得点

		平均	分散	最小値	最大値
第1志望	不満低群 (N=29)	4.17	0.58	2.7	5.0
	不満高群 (N=22)	2.95	1.02	1.0	4.8
第2志望	不満低群 (N=20)	3.92	0.95	1.3	5.0
	不満高群 (N=14)	2.83	0.83	1.2	4.0
第3志望以下	不満低群 (N=23)	4.03	0.85	2.3	5.0
	不満高群 (N=9)	3.54	0.64	2.7	4.7

表12-2 分散分析の結果

	Type III_SS	df	MS	F	p	ηp^2
志望順位 (A)	2.504	2	1.252	1.806	0.169	0.032
不満低・高群 (B)	22.016	1	22.016	31.754	0.000	0.222
A × B	2.413	2	1.207	1.740	0.180	0.030
s	76.958	111	0.693			

表12-3 分散の均一性の検定

	χ^2	df	p
Bartlett Test	9.447	5	0.093

③「友人関係満足感」得点の差

志望順位別による入学後不満低群と入学後不満高群の「友人関係満足感」得点の結果を表12-1にまとめた。

2要因の参加者間分散分析 (Type III_SS使用) を行った結果 (表12-2参照), 志望順位の主効果が有意でなく ($F(2, 111) = 1.806, p = 0.169, \eta p^2 = 0.032, 1 - \beta = 0.388$), 学後不満低・高群の主効果が有意であり ($F(1, 111) = 31.754, p = 0, \eta p^2 = 0.222, 1 - \beta = 0.999$), 交互作用が有意でなかった ($F(2, 111) = 1.74, p = 0.18, \eta p^2 = 0.03, 1 - \beta = 0.375$)。

入学後不満低・高群の主効果の検出力 ($1-\beta$) は十分である。

参加者間の分散の均一性についてBartlett検定を行った結果 (表12-3 参照), 有意でないことを確認した ($\chi^2(5) = 9.447, p = 0.092$)。

入学後不満低・高群の主効果について, 入学後不満低群の平均4.056が入学後不満高群の平均3.029よりも有意に大きかった。

④「学び満足感」得点の差

志望順位別による入学後不満低群と入学後不満高群の「学び満足感」得点の結果を表13-1にまとめた。

2要因の参加者間分散分析 (Type III_SS使用) を行った結果 (表13-2 参照), 主志望順位の主効果が有意であり ($F(2, 111) = 6.213, p = 0.002, \eta p^2 = 0.101, 1-\beta = 0.902$), 入学後不満低・高群の主効果が有意であり ($F(1, 111) = 19.553, p = 0, \eta p^2 = 0.15, 1-\beta = 0.994$), 交互作用は有意でなかった ($F(2, 111) = 1.391, p = 0.253, \eta p^2 = 0.024, 1-\beta = 0.308$)。

志望順位の主効果の検出力 ($1-\beta$) は十分である。入学後不満低・高群の主効果の検出力も十分である。

参加者間の分散の均一性についてBartlett検定を行った結果 (表13-3 参照), 有意でないことを確認した ($\chi^2(5) = 6.781, p = 0.237$)。

志望順位の主効果について, プールドSDを用いた t 検定による多重比較 ($\alpha = 0.05$, 両側検定) を行った結果, 第2志望群の平均3.965が第3志望以下群の平均3.469よりも有意に大きかった ($t(114) = 2.451, \text{adjusted } p = 0.047$)。

入学後不満低・高群の主効果については, 入学後不満低群の平均3.967が入学後不満高群の平均3.396よりも有意に大きかった。

以上の p 値の調整にはBenjamini & Hochberg (1995) の方法を用いた。

⑤「教員サポート感」得点の差

志望順位別による入学後不満低群と入学後不満高群の「教員サポート感」得点の結果を表14-1にまとめた。

2要因の参加者間分散分析 (Type III_SS使用) を行った結果 (表14-2 参照), 志望順位の主効果が有意でなく ($F(2, 111) = 0.239, p = 0.787, \eta p^2 = 0.004, 1-\beta = 0.088$), 入学後不満低・高群の主効果が有意であり ($F(1, 111) = 16.989, p = 0, \eta p^2 = 0.133, 1-\beta = 0.987$), 交互作用は有意でなかった ($F(2, 111) = 0.617, p = 0.541, \eta p^2 = 0.011, 1-\beta = 0.156$)。

表13－1 志望順位別による入学後不満低群と入学後不満高群の「学び満足感」得点

		平均	分散	最小値	最大値
第1志望	不満低群 (N=29)	4.01	0.65	1.8	5.0
	不満高群 (N=22)	3.47	0.91	1.8	5.0
第2志望	不満低群 (N=20)	4.14	0.58	2.8	5.0
	不満高群 (N=14)	3.71	0.70	2.8	5.0
第3志望以下	不満低群 (N=23)	3.77	0.82	1.8	5.0
	不満高群 (N= 9)	2.71	1.00	1.0	4.0

表13－2 分散分析の結果

	Type III _SS	df	MS	F	p	ηp^2
志望順位 (A)	7.242	2	3.621	6.213	0.003	0.101
不満低・高群 (B)	11.395	1	11.395	19.553	0.000	0.150
A × B	1.621	2	0.811	1.391	0.253	0.025
s	64.689	111	0.583			

表13－3 分散の均一性の検定

	χ^2	df	p
Bartlett Test	6.782	5	0.237

入学後不満低・高群の主効果の検出力 ($1-\beta$) は十分である。

参加者間の分散の均一性についてBartlett検定を行った結果 (表13－3 参照), 有意でないことを確認した ($\chi^2(5)=6.555, p=0.255$)。

入学後不満低・高群の主効果について, 入学後不満低群の平均2.871が入学後不満高群の平均2.016よりも有意に大きかった。

以上より, 「大学適応感」尺度の4因子の得点はいずれも, 入学後不満低群の方が入学後不満高群よりも高かった。また, 「学び満足感」因子においては, 志望順位においても主効果が見られ, 多重比較の結果, 第2志望群が第3志望以下群よりも得点が高かった。また, 志望順位が入学後不満の数に影響を与え

表14-1 志望順位別による入学後不満低群と入学後不満高群の「教員サポート感」得点

		平均	分散	最小値	最大値
第1志望	不満低群 (N=29)	2.91	0.91	1.0	4.5
	不満高群 (N=22)	1.86	0.78	1.0	3.5
第2志望	不満低群 (N=20)	2.95	1.11	1.0	5.0
	不満高群 (N=14)	2.11	0.87	1.0	3.5
第3志望以下	不満低群 (N=23)	2.76	1.21	1.0	5.0
	不満高群 (N=9)	2.23	0.72	1.0	3.0

表14-2 分散分析の結果

	Type III _SS	df	MS	F	p	ηp^2
志望順位 (A)	0.456	2	0.228	0.239	0.788	0.004
不満低・高群 (B)	16.190	1	16.190	16.989	0.000	0.133
A × B	1.177	2	0.588	0.617	0.541	0.011
s	105.781	111	0.953			

表14-3 分散の均一性の検定

	χ^2	df	p
Bartlett Test	6.555	5	0.256

ているとは言えなかった。

これらのことから、入学後、基本的には志望順位に関わらず「大学の居心地の良さ」、「自分が学びたいことを学べる時間があること」、「大学での友人関係」の3つの要素のうち複数不満を感じている学生は、そうではない学生に比べて、大学適応感も低いと考えられる。

一方で、第2志望で入学した学生と第3志望以下で入学した学生の間で、大学での学びの満足感に対して、その思いの差があることが考えられた。

結言

第1志望ならびに第3志望以下で入学した学生のうち、友人関係において期

待していたものの、その期待どおりとはなっていないと感じている様子が明らかになった。加えて、第2志望で入学した学生と第3志望以下で入学した学生に「学び満足感」で差がみられた。

今後、第1志望と第3志望以下で入学した学生が大学での友人関係に何を期待していたのかを明らかにすることが、中退予防を検討していくために必要と考えられる。

第2志望で入学した学生は、第1志望で入学した学生、第3志望以下で入学した学生とは異なる思いをもっている可能性が示唆された。山下（2014）は、学ぶ目的が明確である場合、大学が第2志望以下でかつ学部第2志望以下など、学びたい学部ではないところに不本意に入学している場合に退学意向が強くなることを示唆している。このことを踏まえると、たとえ大学が第2志望であっても学びたい学部に入学的した場合、学びの満足感が保たれる可能性が考えられる。今回の調査では、大学の志望順位としているため、今後さらに調査する場合は、学部の志望順位ならびに学びたいと思っている分野に入学できているかどうかとも必要となろう。あわせて、この調査における第2志望群の学生についてつぶさにその考えや思いを検討し、第1志望の学生と第3志望以下の学生との違いを検討することが必要であると考ええる。

また今回の結果から、「大学の居心地の良さ」、「自分が学びたいことを学べる時間があること」、「大学での友人関係」の3つの要素に対して、入学前に期待せずまた入学後も不満を感じているならびに入学前に期待していたが入学後に不満を感じている数が複数になると、大学適応感尺度の点数がいずれも低くなった。

小正（2019）は、学生の大学への適応ということに着目し先行研究を概観したところ、中退に影響を与える要因として「帰属意識」、「対人関係」、「学業」の3要因があり、これらのうち2要因が学生にとって満足を得られるものでなくなると中退のリスクが上がる可能性を示唆している。また、小正（2023）は「大学帰属感」に影響を与える要因として「友人関係満足感」、「教員サポート感」、「学び満足感」であることを見出している。中退者にとって、中退（中退検討）前に得られていれば、中退しなかったと思うサポートは「教員や職員からの、学習支援や心理相談」がもっとも高いものであったことから（JAIC, 2024）、在学中には「教員サポート感」を学生はあまり意識していないのかもしれないが、中退を予防するためには、大学の教員による意識的な関わりは重要であると考えられる。

これらを合わせて考えれば、学生に対する中退予防としての取り組みには、大学での学びの工夫と教員が学生に対して関わりを持とうとすることが考えられる。同時に、学生にとって大学に対する居心地の良さとは何かをさらに検討し明らかにすることで、中退予防のための工夫がさらに増すものとする。大仁田（2023）は、1年次生の大学適応には、大学における必要なし暗黙となっているルールの理解に対する助言やサポートを行い、大学生生活に対する理解を高めることを提言している。こうしたことも工夫の1つになると考える。

中退の第1位の理由が、2020年の「経済的困窮」から、2023年には「転学・進路変更等」へ変わったことから（文科省, 2024）、学生が入学した大学・学部で学びたい、学生生活を送りたいと思えるようなキャリア支援は入学前だけでなく、入学後も必要であり、その方法をさらに考えていくことが望まれるだろう。

本論文は、龍谷大学学部FD自己応募研究プロジェクト（2020年度「中途退学の予防に向けた大学適応感質問紙の作成」、2021年度「中途退学の予防に向けた大学適応感質問紙の活用」、2022年度「中途退学の予防に向けた大学適応感質問紙の活用II」、2023年度「中途退学の予防に向けた大学適応感質問紙の活用III」、いずれも研究代表者は小正浩徳）のデータをもとに分析して作成されたものである。

注

- (1) この質問項目は、千島・水野（2015）を参考にして作成した。
- (2) この質問項目は、松井ら（2010）、中村・松田（2013）、坂田ら（2018）を基に作成した。
- (3) 「〇〇」には、「大学の居心地の良さ」、「自分が学びたいことを学べる時間」、「大学での友人関係」がそれぞれ入る。

引用文献

- Benjamini, Y. & Hochberg, Y. (1995) Controlling the false discovery rate: A practical and powerful approach to multiple testing. *Journal of the Royal Statistical Society Series B* 58 pp.289-300.
- 千島雄太・水野雅之（2015）入学前の大学生活への期待と入学後の現実が大学適応に及ぼす影響 *教育心理学研究* 63巻3号 pp. 228-241
- Cohen, J. (1992) A power primer *Psychological Bulletin* 112 pp.155-159
- 樋口健（2013）大学1年生の転学・退学の意向とその処方箋 ベネッセ総合教育研

- 研究所 <https://benesse.jp/berd/berd/focus/4-koudai/activity3/> 2024/7/30
- JAIC (2024) 2023年度 中退データ集 <https://www.jaic-g.com/wp-jaic/wp-content/uploads/2024/06/sec2023data.pdf> 2024/7/30
- 小正浩徳 (2019) 大学生の中途退学に関する心理的要因の文献研究 龍谷大学論集 第493号 pp.40-56
- 小正浩徳 (2020) 中途退学の予防に向けた大学適応感質問紙の作成 龍谷大学2020年度 自己応募研究プロジェクト報告書 pp.7-11
- 小正浩徳 (2023) 大学生の退学への思いに対する大学適応感の影響 龍谷大学臨床心理学紀要 第11号 pp.13-18
- 松井洋・中村真・田中裕 (2010) 大学生の大学適応に関する研究 川村学園女子大学研究紀要 第21巻 第1号 pp.121-133
- 文部科学省 (2021) 新型コロナウイルスの影響を受けた学生への支援状況等に関する調査 https://www.mext.go.jp/content/20210216-mxt_kouhou01-000007001-1.pdf 2024/7/30
- 文部科学省 (2024) 令和5年度 学生の中途退学者・休学者数の調査結果について https://www.mext.go.jp/content/20240627-mxt_gakushi01-000013028_1.pdf
- 中村真・松田英子 (2013) 大学生の学校適応に影響する要因の検討：大学不適応、大学満足、就学意欲に着目して 江戸川大学紀要 第23号 pp.151-160
- 大仁田香織 (2023) 中退に影響を及ぼす大学不適応要因の検討 現代社会文化研究 No.76 pp.125-136
- 坂田浩之・佐久田祐子・奥田亮・川上正浩 (2018) 大学生生活充実度と大学へのリテンションとの関連：SoULS 21を用いた縦断的研究 大阪樟蔭女子大学研究紀要 8巻 pp.39-46
- 山下仁司 (2014) 【調査研究】 大学生の中退防止に向けて ～入学時退学意向の要因は何か ベネッセ総合教育研究所 https://benesse.jp/berd/koutou/topics/index_4131.html 2024/7/27
- 谷田川ルミ (2017) 大学入学時の“期待”と退学時の“満足度”による類型別の分析 家庭の経済状況・社会状況に関する実態把握・分析及び学生等への経済的支援の在り方に関する調査研究 pp.137-149

キーワード 中退予防 大学生生活への評価 大学適応感